

(令和2年)2月16日(日曜日)

読売新聞朝刊

(第3種郵便物認可)

# 男性の地域デビュー コツは?



笑いが絶えない「ジョークサロン」に参加する野本さん(前列左から4人目)

本格的な春の訪れはもうすぐ。退職などをきつかけに、春から新しいことに挑戦しようと考えている人もいろいろ。地域デビューしたり、サークルに参加したりするのはどうすればいいの?くらゐの愛読者組織「よみうり生活応援隊」の男性メンバーに経験を聞いてみた。(板東玲子)



## 頼まれたら断らず \*まず自治会に参加

「頼まれるのが花。頼まれれば断らず、引き受けてみては」と話すのは、埼玉県の外山毅さん(67)。60歳で企業を退職した後、声がかかると自治会の役員に就いた。知人の勧めもあって地元自治体の行政改革推進委員会の委員にも応募し、採用された。「仕事が増えたので新規のものは断っているが、暇な毎日よりはずっといい。視野も広がるし、何より誰かの役に立てて幸せです」

大阪府の田中恭雄さん(75)は65歳で退職。一人でウオーキングなどを楽しんでいたが、3年前に自治会の当番がまわってきた。役員になった。「深く考えず、身構えず、前向きな気持ちで挑戦した」

住民が描いた絵を集めて展覧会を開催するなど、1年の任期を終える頃には地域の人の顔と名前が一致するようになり、雑談できる相手が増えた。「地域のことをよく知らないまま40年以上ここに生きてきたが、『この街で生き

ている』という実感が持てるようになった」

役員を退いた今も、交通安全運動や避難訓練、お祭りなど地域のイベントに積極的に参加している。

女性はPTAなどを通じて地域との関わりを深めてきた人が多く、一方、男性は退職後に「何をしたいかわからない」という人が少なくない。自治会役員を10年続けている山形県の三浦健司さん(70)も「まず身近にある自治会に参加し、人の輪に入ってみてはそれが第一歩になるはず」と勧める。人脈ができれば、災害などいざという時にも心強いと語る。

地域で学び直しをする人も。兵庫県の川口正洋さん(62)は昨年、「よみうり生活応援隊」に通い始めた。阪神大震災の教訓を踏まえて創設された塾では、地域で活躍できる人材になるためにボランティア活動やコミュニケーションの手法などを2年間かけて学ぶ。「震災当時は大阪府の公務員だったので、被災した地元のために働けなかった。ずっと地元のために何かしたかった」と明かす。

コミュニケーションの心得は、まず人の意見を聞き入れること。心をオープンにして自分をさらけ出すため、「飲みニケーションも重視している」と笑う。

「笑いを共有する楽しさは、生きるエネルギーにつながる。趣味の活動には、仲間を誘ったり、情報を集めたり、自分から動くことが大事です」と、助言してくれた。

「応援隊」の記事は毎月第3日曜日に掲載し、日曜の朝には休みます。

好きなと続けやすい地域やサークルなどの活動を長く続けるコツについて、「子どもの頃に好きだったものが、関心があったものは続けやすい」と語るのは、東京都の野本浩一さん(68)。言葉遊

上手に社会参加するためのコツは? 応援隊の女性メンバーからのアドバイスを紹介する。

- 市区町村の広報紙などに多彩な行事や催事が紹介されているので、活用したい。(東京都・赤柴展子さん 61)
- まずは笑顔であいさつ。これだけで印象が全然違います。(群馬県・角田佳代子さん 49)

「広報紙活用」「自分から話す」女性メンバーの声

- 少しでもいいので、自分から話してみよう。謙虚な気持ちでいろいろ教えてもらい、慣れてきたら少々ニューモアを交える。(埼玉県・山内孝子さん 50)
- プライベートなことは、相手から話してくるまでは聞かない。(山口県・中野晴菜さん 40)
- どんな意見もいったん受け止める。文句は提案に変える。自慢より失敗談を。(大阪府・中村優美子さん 57)



笑いが絶えない「ジョークサロン」に参加する野本さん（前列左から4人目）

わないことがルールだ。  
「笑いを共有する楽しさは、生きるエネルギーにつながります。趣味の活動には、仲間を探したり、情報を集めたり、自分から動くことが大事です」と、助言してくれた。

ぴが好きで、1989年に仲間と冗句を言い合う「ジョークサロン」を発足させた。都内で毎月例会を開き、創作した都々逸や回文、川柳、小話などを会員同士で披露し合ってきた。他人の作品を悪くい

好きだと続けやすい  
地域やサークルなどの活動を長く続けるコツについて、「子どもの頃に好きだったもの、関心のあったものは続けやすい」と語るのは、東京都の野本浩一さん(68)。言葉遊